

---

# おわるせかい

七瀬 くぬぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おわるせかい

### 【コード】

N0835BA

### 【作者名】

七瀬 くぬぎ

### 【あらすじ】

そして終わり続ける。

## はじめはクロスバイク

もう駄目だった。

何がどう駄目だとかなんにも分からないけど分からないから駄目だと思った。

もう僕はここに居られないし居たくない。

助けて欲しいし助けて欲しくない。

一步を踏み出して全部ぶちこわしにしても全てをやり直したい。だから僕は帰る。

突然猛烈な目眩に襲われた。

世界が一気に歪み、吐き気と頭痛に襲われ、視界が明暗する。思

わず床に手をついた。その拍子に読みかけだった小説が落ちる。

しばらくそのまましていると、段々と歪みが消えていき、まはた瞬きを繰り返すと頭痛もきれいに消え去った。しかし耳鳴りだけがキンキンと鳴り続け、中々治まってくれない。間延びしたモスキート音みたいな音を振り払うように頭を振ったりしても駄目だった。

しかたなく畳に落ちていた読みかけの小説を読み返すも、集中できないせいでまともに頭に入っていない。しかし耳鳴りで小説に集中できないのもなぜだか尺なので、張り合っただけでしばらく無理矢理読み進めたが、結局折れたのは僕だった。

「……あほらし」

なんで自分の耳鳴りと張り合ってたんだ、あほか。

そして自分の行動に自分でツッコミ入れてる自分もあほらしい。つか虚しい。

そんなことよりも、さっきの目眩その他諸々はなんだったんだ。

体は昔から丈夫な方だと自負しているし、病気なんてインフルエンザぐらいしかかかったことがない。そのインフルエンザだって、タミフルさんの助けも借りずに2日で治すという偉業を成し遂げた、まさに”馬鹿は風邪引かない”を体現している僕に、目眩頭痛吐き気耳鳴りなんて吉川あたりが聞いたら「天変地異が起きるんじゃないか」と素面で言っただけさ。いや、あいつは常にしんどい状態にあるか。多分空から槍が降ってきてても「ああ」しか言わないくらいに冷静な野郎なのだ。というか平静だ。いや、でも槍が降ってきたらさすがに「おお」ぐらいは言うかもしれない。高校の時にバットが窓硝子突き破ってきたとき（野球部のミスらしい。けが人は居いなかったがもちろん休部だ）すらあいつはチラッと目を向けただけで一人ケータイを弄っていた。大学入ってもいまだにまともな喜怒哀楽を見たことがない。結構つきあいが長い身としてはもうちょっと感情を出してくれてもいいんじゃないかと少し寂しい僕だった。

って、吉川の事はどうでもいい。誰が好きであんなサイボーグ野郎のことを考えなくてはいかんだ。

しかし限りなくどうでもいい吉川の事を考えている間に、いつのまにか耳鳴りは治まっていた。いつのまにか消えてくれるなら、さつき小説を読んでいるときに消えてくれればよかったものを。つくづくむかつく耳鳴りだった。

だからなんで自分の耳鳴りにむかっついてんだよ。

……。

「……外でるか」

段々自分が悲しい奴に思えてきたので、コンビニに行く。

僕が謎の目眩頭痛以下略に悩まされるのも、自分で自分にツッコミを入れなければならぬのも、全て無駄に長い冬休みが行けないのである。一人暮らしの男にとって、大学の長い長い休みは暇をもてあますほかない。吉川の野郎はちゃっかり彼女がいるし、大学仲間にはほとんど実家だし、僕も実家に帰りたけれど帰れないし

「ん？」

僕の両親は健在だし、妹も確か高校受験まったただ中なはずで、実家は県を跨ぐが一時間あれば着く場所にある。

帰れないはずがない。そう、帰れる。

「。。。」

わずかな戸惑いを意図せず意識的に断ち切って、上下グレーのスウェットからジーパンにTシャツと厚手のパーカーに着替える。十二月下旬になると手袋なしで自転車に乗るのは辛すぎるので、ネットクウォーマーと手袋を追加。家賃は安い立地が悪いアパートのせいで、ここから最寄りのコンビニでも自転車で十分はかかる。ちなみに駅までは自転車で二十分。まともなバスもないので自転車は僕の一番身近な交通手段だ。もちろん四輪の免許は持っているが、車に乗ろうとは思わない。

なぜなら、自転車の方が環境に優しいし健康にもいい。まさに理

想の交通手段だからだ。

場所も取らないし、ちょっと出かきたいなと思ったたらすぐ行ける。まさに理想の交通手段だからだ！

……車って高いんだよな。

バイクに乗ろうと思わないのも以下略である。

大事なことなので三回言わせてもらうが、理想の交通手段である自転車がある駐輪場はアパートの入り口手前にある。

戸締まりを終え、さてコンビニに向かおうと階段を下りると（僕の部屋は二階にあるのだ）、駐輪場にあるべき僕のシルバーのシテイサイクル、かっこよく言ってしまったがつまり普通のシルバーの自転車があるべき場所には、黒のスタイリッシュなクロスバイク

ロードレーサーとマウンテンバイクを合わせた自転車　　が、鎮座していた。

「……だれのだよ」

滅茶苦茶かっこいいクロスバイクは、初めて見た物で、アパートの住人の誰かが買い換えたのかと思ったが、その割には使い込んであるようだ。だが狭い駐輪場でこんな格好いいものがあつたら誰でも気付くし、第一この置き場所は僕の自転車の定位置だ。別にここに僕以外の人間が自転車を置いてはいけないという決まりはないが、暗黙の了解として皆それぞれ置き場というのがるのである。ま、大方だれかの客人のものだろうけど。

しかし、それなら肝心の僕の自転車は何処へ消えてしまったのだろうか。

駐輪場にはないし、アパートの裏も試しに覗いてみたが見あたらない。

まさか　あんなボロチャリが、盗まれた？

どうせ盗まれないだろうと思って鍵をかけなかったのがいけないのか。

「まじですか」

いや、ほんとに、勘弁してくれ。

ただでさえ生活がかつかつなのにこれ以上出費が増えたらしくら  
くまた百均のパンと水だぞ。

奨学金とバイト代と少しの仕送りで生きている身、経済的に一万  
円の出費は結構きつい。

まああんなボロチャリ、愛着なんぞ小指の甘皮の端ほどもないけ  
ど、あれがなきゃ大学や駅までいく時間が倍近くかかることになっ  
てしまう。僕としてはこれ以上時間が削られるのも体力が削られる  
のも御免だ。

「どーこだー」

そう言いながらボロチャリを探し回る僕の声は、相当絶望的なも  
のだったに違いない。

絶対に無いと分かっている細い隙間まで探しても、中々あきらめ  
が付かなかった。

駐輪場に戻ってみるもちろんない。本来ボロチャリが置いてあ  
る場所にクロスバイクが置いてあるのを見ると、理不尽な怒りが湧  
いてくる。

そうだ、このクロスバイクが、全ての元凶なのだ。

年末一人なのも吉川に彼女がいるのも自転車すへからを盗まれたのも車を  
買う金がないのも変な目眩も、すへから 須くこのかっこいいクロスバイクの  
せいなのである！

ものすごい形相でクロスバイクをにらみつけ鼻息を荒くする僕は、  
傍目から見たら変態だった。

こつゆうことを、八つ当たりという。

兎も角、長い距離を歩いてまでコンビニに行かなければ行けない  
理由もなかったので、ちゃっちゃと部屋に戻る。こんな寒空の下ク  
ロスバイクとにらみ合ってもなんの得もない。

僕はクロスバイクに向かって思いっきり舌打ちして、未練がないことを誇示するように勢いよく振り向いた。

お姉さんがいた。

「おうわあ!？」

「おおっ」

驚きすぎて足がもつれ、僕は派手に転倒した。

お姉さんはそんな僕をみて腹を抱えて爆笑していた。

あまりの恥ずかしさに顔が火を噴きそうなほど赤くなったのを自覚する。

「いやー、そんなに驚くとはね。ごめんごめん。」

どうやら僕の真後ろにいたのはわざとだったらしい。初対面でいきなりそんな事をするとはずいぶんフレンドリーな人だ。

お姉さんは目測で二十代前半、僕よりちよいと上ぐらいだろうか。編み上げブーツにデニムのダメージジヨージパンで、胸元が大きくはだけたシャツに真っ赤なファー付きダウンジャケットを羽織っていた。そんなパンク系の外見に少々つり目なものもあいつて、昔は埼玉統一とかしてそうだと勝手な感想を持った。なんで埼玉なのかと問われると答えようがないが。まあ雰囲気は埼玉っぽかったのだから。シヨージパンから覗く細くて長い足は惜しげもなく晒され、なんとというか、こう、目のやり場に困りました。

「はい」

お姉さんが手を差し出すと、長いポニーテールがそれにあわせてゆらゆらと揺れる。少し立ち上がるのに手こずったフリをするのも仕方あるまい。僕だって健全な日本男児なのだ。日本男児はみんな美人とおっぱいが大好きなのだ。

と、手を取ろうとした瞬間、引っ込められた。

当然僕はバランスを崩し、危うくまた転びそうになった。

「な、なにするんですか」



「いや、なんか下心が見えた気がして」

お姉さんの瞳が一瞬鈍く光る。これだから察しが良い美人は苦手だ。

「それより、良いの？ その自転車」

「え？」

僕はここで初めてクロスバイクを下敷きにしていたことを自覚した。壊れてはいないようだが、傷が付いたのは間違いないだろう。

慌てて起こして見てみると、案の定フレームに傷がたくさん出来ていた。

「あちゃー……」

やってしまった。

汚れただけかもと思って傷を擦っても消えないのを見ると、塗装が軽くはげてしまったらしい。

「ありやりや、大事に手入れしてたのにねー」

半分同情半分他人事でお姉さんが言った。

あんたも間接的な原因でしょうに。

まあ転んだ僕が悪いんだが。

ていうか、

「これ、誰のかわってるんですか？」

ならば知らんふりを決め込んでこのままにしておくのも後々恨まれそうだ。正直そうしたかった、というかそうするつもりだったのに。万が一にアパートの住人だったらお詫びの品とか渡した方がいいのだろうか。しかしお姉さんの知り合いとなると、ヤンキー系兄ちゃんしか思い浮かばないぞ。人を見かけで判断しちゃいけないと分かってるけど、お姉さんに見かけと中身のギャップは望めなさそうだから、これは明らかに類は友を呼ぶパターンに違いない。僕の脳内では修理費を搾り取られる図がどんどん展開されていく。

僕がそう聞くと、お姉さんは目をぱちくりとさせた。外見は肉食っぽいがそうゆう仕草はどことなく小動物を連想させる。

「いやそれ、あんたのでしょ？」

「へ？」

いやいや、僕の相棒は今亡きボロ自転車ですよ。

「どうしたの管野、どっか頭打つたの？」

僕との食い違いに違和感を覚えたのか、少し戸惑った様子でお姉さんは言う。

どうして僕の名前を知っている？

なんでそんな、まるで友人と話す時のような表情ができる？

お互いが圧倒的に矛盾している違和感。

「え、えつと……」

どうゆうことだ？

お姉さんは初対面だし僕の自転車はボロボロだ。人違いという線は名字をあてられている時点で薄い。ストーカー？ いやいやない。新車の冗談？ いやいやなんで。

頭を整理するために、確認の意味も込めて、僕は言う。

確認する必要もないくらい当たり前前の質問。

「あの……失礼ですが、初対面ですよね？」

それを言うと、彼女は初め冗談と受け取ったのか

「なに、貸した五千円無かったことにしようとしても駄目だから。利子つけて返しなさい」

僕には何のことかさっぱり分からない。

冗談半分に凄んでいたお姉さんは、そんな僕の阿呆みたいな表情をみて、戸惑いと苛立ちの色を濃くしていった。

「ちよつと、そうゆう冗談やめてよ。麗しき隣人を忘れたふりするとか何様？」

「り、隣人？」

「本当に頭打っちゃったの？」

そっちのほうがずっとマシだった。

はじめはクロスバイク（後書き）

今年もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0835ba/>

---

おわるせかい

2012年1月2日00時06分発行